
煙

瀬崎 神奈

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

煙

【Nコード】

N5480B

【作者名】

瀬崎 神奈

【あらすじ】

成績優秀の大輔はあることがきっかけで出会った女子高生に目ぼれをする。家族関係、今の日常、友人関係、そして、出会ったばかりの女子高生。いろいろなことに悩む中学生を描いた物語。第4話UPしました！

第1話（前書き）

不良のせりふの中で意図的に漢字間違いがあります。それ以外で誤字脱字を見つけましたら教えてください。

第1話

僕はただちよつと冒険したかっただけなのにどうしてこんなことになつてしまったのだろう…

「な」。ちよつとでいいから金かしてくれてゆつてんだろ。別にとるわけじゃないただかすだけだ。」

「だから、持つてません。」

「そんなこたあーねーだろうが。ああ？最近のチュウガクセイは俺らなんかよりずっと金もつてんだろ。欧られてーのかてめえ。」

「本当に持つてないんです。」

僕は涙目で訴えた。しかしこの不良達は聞き入れてくれそうにないやばい。これは非常にまずいぞ。母さん、不良にならないようにはしてくれたけど、不良に絡まれたときの対処の仕方は教えてくれなかったね。先生、奇麗事で片付かないこともあるよ。逃げるとか大声を出すとかそんなことできる状態じゃないし、周りみんな知らん振るかひそひそ話または笑つて見物している。学校で教える奇麗事なんて何の意味もないじゃないか。

「しょうがねえなあ。それじゃあちよつと痛い目でも見てもらおうか。」

不良の一人がこぶしを振り上げる。もうだめだ…

そのとき、サツと何か白いものが飛んできた。

手と手がぶつかり合う音が響く。混乱している頭で見てみると、女の人が片手で男のこぶしを受け止めていた。そしてもう片方の手にはなぜかかわいらしいウサギのぬいぐるみを持っていた。

「おいおい。オニイサンたち。こんなところで何やってんのあ？」
まのびした声で彼女は言った。

「うつせえなあ。お前には関係ねえだろうがあ。」

「それがそうでもないんだよなあ。その少年はオレの可愛い弟なんだ。悪いけど放してやってくんないかなあ。」

「いやだね。女一人で何ができるんだ。痛い目見たくなかったらさっさと帰んな。」

「そうだそうだ。」仲間たちがゲラゲラ笑いながら次々合いの手を入れた。

「女で悪かったなあ。オレは男女差別が一番嫌いなんだよ。」

言うが早いか、僕の姉だと名乗った女の人は男たちに次々と攻撃を仕掛けていった。反撃してくる不良たちを華麗によけ次々と倒してゆく。そんな彼女はなぜだか場違いな感じがして、一人際立って綺麗だった。僕はただぼおつとその様子を見ていることしかできなくて、気がついたときには 覚えてろ。とすて台詞をはいて逃げていく不良たちがいた。

「つるんでしかなにもできないなんて情けねえ。いいきみだ。」そして彼女は僕に近づいてくる。制服を着ているところを見ると高校生のようだが、かなり着崩していてどこの学校かはわからなかった。しかし、それがとっても似合っていて、カッコよかった。ぼくはまたぼおつと見ほれていた。

「・・・えは？」

「へ??？」

「だから、名前は何だって聞いてんだよ。な・ま・え」

「あ、名前ですね。ユウタっていうんです。」

「じゃあゆった。こんな時間にこんなところろってつとまたあ
あいう目にあうよ。気をつけな。」

さつきとはだいぶ違って易しい口調で彼女は言った。そして、僕の
頭にポンと手を置くと走り去ってしまった。

「あ、待つ……。」「後ろを振り向いたときには彼女はもういなく
てただ東京にある高いビルの合間から真っ赤に染まった空とそろそ
ろ時間だというように暖簾のれんをかけている居酒屋があるだけだった。
あ、れ？

まるで夢を見ていたようにあつという間に過ぎていった出来事だっ
たけれど、たしかに僕には手の暖かな感触と足元にはあのかわいら
しいウサギのぬいぐるみが残っていた。

夢じゃない

僕はぬいぐるみを拾うとかすかな興奮を覚えながら帰路についた。

第2話（前書き）

誤字脱字等を見つけたら、教えてください

第2話

「大輔、今日は帰ってくるの遅かったけどどうしたの？」
だいすけ

「別にどうもしてないよ。ちよつと残って先生に質問してただけ。」
冷めたご飯を食べながら僕は言う。 平静を装っている僕だけど、
まだかばんの中に入っているあのウサギのことを考えるとドキドキ
していた。

「そう？ならいいけど、あんまり心配かけないでね。」母さんはそ
ういうとまだ小学生の弟を寝かしにいった。

弟の世話に忙しくて心配なんてしてないくせに。

でも、今日はあまり気にならなかった。だって僕にはウサギがある
から。

そそくさとご飯を済ませると、すぐに二階にある自分の部屋へと向
かった。

かばんを開けてウサギを取り出す。そのウサギを見ると、罪
悪感に刈られた。僕にもあんなお姉ちゃんが欲しかった。あの人に
まで嘘をついてしまった。

もうわかつているかもしれないけれど、僕の本当の名前は島村大輔。
でも、この名前にはお母さんやお父さん学校ほかにもいろいろなもの
が常についてまわる。

僕にはそれがどうしてもいやだった。どうしても。だから、僕のこと
とを知らない人と話すときには偽名を使うことにした。『ヤマグチ
ユウタ』この名前ときは僕だけを見てくださいるような気がしたから。
ほかの誰でもないただ僕という存在を。

ウサギのぬいぐるみなんてどう考えても女物だったから、部屋にお
いていると怪しまれてしまう。考えた末、またかばんの中にしまっ
ておくことにした。

そうするとまた彼女に会える気がするしね。

第3話

風を切る音がした。そう思ったときにはもう、僕の額にチヨークがクリーンヒットしていた。額に鈍い痛みが走る。

何事もなかったかのように、また板書を再開したのは『木村 守』きむら まもる。僕らのクラスの担任だ。

みんなの忍び笑いが起こる。

彼はゆっくり振り返って

「島村があたるなんて、めずらしいなあ。あんまりぼおつとしてへんと、しっかり授業聞きなはれ。」ゆったりとした口調で言った。何で東京に住んでいるのにこんな話し方なのかというと、子供の時に色々なところで方言を覚えたので混ぜてしまったのだといっていた。

今は5時間目、お腹がいっぱいになっているし、彼のゆったりとした口調が眠気を誘う。でも、うとうとしていると、たちまち彼の手からチヨークが飛んだ。今時そんなことをしていると、児童虐待とか言われそうだが起きている人にとっては面白かったし彼は決してはずさなかった。

まあ、僕は例外だったけどね。。。

今日はじめて当たったけど、音の割にあまり痛くなかった。

恥ずかしかったけど……。守はみんなから結構人気があった。僕も守は嫌いじゃない。授業も上手いし優しいからだ。

でも、今日は昨日塾でやったばかりだった範囲で暇だったのと、昨日の女の人のことが気になってついつい上の空になってしまったのだった。

もうチヨークにあたるのはごめんだ。楽しいことでも考えよう

そう思い、次はどこへ行くかと考えた。

僕は小さいころから冒険が大好きで色々なところへ言ってみるのだから冒険といったって、今まで行ったことのない街に行ってみる

ぐらいで、全然大したことはないんだけど…

最近は何々に行動範囲を広げている。次はどこへ行こうとか、行つてどうするかといった計画を立て、実行するのがすきなのだ。

でも、昨日は失敗だった。不良に絡まれて、結局目的地にたどりつけもしなかった。不良にからまれるなんて、本の中だけの話だと思つていたから、完璧に想定外だ。

今度はしっかりと計画を立ててからにしよう。

密かにそう心に誓った。

もちろん、こんな年になつて将来は冒険家になりたいなんてそんなこと思っているわけではない。そんな甘い考えじゃ生きていけない。それぐらいのことはわかつているつもりだ。

それに、僕は自慢じゃないけれど結構頭がよかった。学校では常に5本の指に入っている。といつても全国レベルでは50番台だったけれど…。

僕はいつもこう思っていた。「どんな職業になつても、自分の目で色々なことを見ておくのは必要だ。」ってね。まあじいちゃんの受け売りなんだけど…。

おっと、話がだいぶそれた気がする。えっと…何の話だっけ…。あ、そうそう今度どこへ行こうかって話だ！

「ねえねえ。」急に僕の隣に座っている春風夏希はるかぜなつきが離しかけてきた。

「なに？えっと…春風。」彼女を見つつ返事をする。

「名前覚えててくれたんだね」「彼女が微笑んだ。

「ああ、それで何？」

「いや〜。島村君、すごい面白い顔してたよ」「とても楽しそうに笑いながら彼女は言う。

「だったら何？」動揺を抑えて言う。

「別に。でもさ、島村君って頭がよくていつもむっつりしてるイメージがあるけど、意外と面白いんだね」

「…。」自分が面白い顔をしているなんて思つても見なかったから、内心かなりあせっている。

「それにさ、かわいいウサギのぬいぐるみ持つてるし」「彼女はチャックが開けっ放しの僕の学生かばんを見ながら言う。

「あ……。それは別に僕のものじゃ……。」「
ヒュン

僕と彼女の間をチョークが見事にすり抜ける。そしてブーメランのようにUターンして、守の手におさまった。

「島村。同じ授業で3度やったら、坊主が反省文10枚やでえ。」
そう間延びした声で言うと、また何事もなかったように授業を再開した。

「ごめ〜ん。」春風は手を合わせて小さく僕に謝ってきた。
「別に、大丈夫。」僕も小さく返事をしてえつと：今度どこへ行こうかというのを考えることにした。さすがに坊主はごめんだ。

僕が冒険をしに行くのはだいたい塾のない平日だ。と言っても母さんが専業主婦なのでばれないようにするのは結構大変。だから、月一度ぐらいしか冒険はできない。中学生は結構苦労するのだ。

今少し興味があるのは、“おばけが出る〜”と言われている廃墟だ。もうずいぶん前に使われなくなった所らしい。経営が苦しくなったので夜逃げしたとか言われている。お化けとかはどうでもいいのだが、ビルの構造がどうなっているのか知りたいのだ。

それに、使われていたものがまだ残っているかもしれない。そう考えるといてもたつてもいられなくなる。はやくそのビルに行ってみたくてしかたがない。

やっぱり今度行くのはそこにしよう。そう決めたとたん、授業の終わりをつげるチャイムが鳴った。まだ後一時間授業が残っている。しかも、次の授業は古文。その先生は小原おはらといって、声は小さいしかみまくるし板書はほとんど教科書を写すだけ、最悪の先生だ。何をやっていても注意はしないし、若くてキョドっているからみんなに嘗められている。

だからみんなは手紙を回したり、内職したりと好き勝手にしている。

ぼくは、ビルへ行くための計画を立てようかと思ったけれど、まだ情報が少なすぎるのでやめた。しかたがないから宿題で出されたレポートでも書くか。しばらく、チョークが黒板をこする音と先生のためらいがちな声、そして時々起こる忍び笑いが教室を満たしていた。もう授業が終わろうとしていた。みな教科書類を片付け、帰り支度をはじめめる。僕も同じくレポートを片付けようとした時、突然小原がキレた。お国言葉が出ていてよく聞き取りにくい。というより、誰もまともに聞いていなかった。でも、小原がキレるなんて珍しい。

今日は槍が降るかもしれない。

第4話

「大輔。今日塾だな。始まるまでマツクいかな？」
話しかけてきたのは、僕と同じ塾に通う片岡翔だ。かたおか しょう

こいつはサバサバしてて、はつきりものを言うから好きなやつの人だ。もちろんloveじゃなくてlikeだが。

「ああ、別にどこも行くと来ないし。そうしようか。」

そういうと、教室を後にする。べつに理由もなく暇つぶしに友達とマツクぐらい行けど、少し疑問に思う。わざわざ僕にかまわなくても翔にはいくらでも友達がいるだろうに、なぜか事あることにばかり絡んでくるのかと。

教室から昇降口まで並んで歩いているとき、ふと翔は口にした。

「おまえ、今日ちょっと変じゃないか？」何気ない口調だったけれど、確かに核心をついている。

「そ、そうかな。」声を落着けようとしたが、少し裏返ってしまった。薄暗い廊下を早く抜けたくて仕方がない。

「うん。そう。いつもなら理論ずけて真っ向から否定するのに今日は違うし、なんか落着きがねえよ。学校1の頭脳の癖に。」

「そういう言い方やめろって言っただろ。だいたい翔だって頭いいじゃないか。天才少年。」少し高いところにある目をにらむ。

「あはは。わりいわりい。でも、10番と1番じゃ大きな違いだぞ。ていうか俺、天才じゃないし。努力の賜物だもん。」

「そうだな。」無意識のうちに声が小さくなっていった。

胸のどこかで何かがざわめく。よくはわからないけど、なんだか苦しい。

「何かあったら話せよ。」さわやかな笑顔を向ける。僕の頭をくしやりとすると、それ以上何も聞こうとしなかった。

第5話

昇降口には春風がいて、なぜかにここにことこつちに手を振ってくる。しかもいつもつるんでる女子たちはいなくて一人だった。

「よお。1人なんて珍しいじゃん。どおしたの？」気さくな翔が何気なく聞く。

「ん？島村君と片岡をまつてたんだよ」

「ひつで。俺は呼び捨てなわけ？」翔が完璧にずれた突込みをする。「だって片岡に敬称をつける必要がどこにあるの？」

「こないたいけな少年捕まえて、何てことこのよ、なつきちゃん」女の子のような声で翔が答える。

「誰が名前で呼んでいいって言ったのよ！」

「やだなつきちゃん、こわい」

「あんたのほうが、そんな大きな体して変な声出さないでよ。もうぼくは、翔のノリに軽く引きつつも、二人の話し声は右から左にぬけていく感じだった。」

「・・・・・・な、大輔。」

「え？」急に話を振られて我に返る。

「おいおい、聞いてなかったのかよ？」

「あ、うん。わり」

「まあいいけど。春風が今日から塾一緒だから、一緒に行こうだつて。別にいいよな？」

「ああ、いいんじゃない？」僕が答えると、春風は小柄な彼女にぴったりな、かわいらしい笑顔を向けて、ありがとうと言ってきた。そのひまわりみたいな笑顔を向けられると、くすぐったいような、うれしいような不思議な気分になせられる。

翔が靴箱を開けた時、

「あ。」短く声を上げた。

「またいつものか？」僕がきくと

「悪いな。先にマック行つといて」翔はそう言いながら、靴箱に入つてたピンクの手紙をつかむ。

「おゝ。がんばれ。」僕は翔の背中に声をかける。

「ね。島村君、片岡放つておいていいの？」

「え？なんで？」

「だって、不良とかに呼び出されたんじゃないの？」眉毛をへの字にしながら真剣な顔で僕に聞いてくる。

おもわずぶつと吹き出してしまう。

「なんで不良がピンクの手紙で呼び出すんだよ」僕の返事を聞いて春風の顔には、はてなマークが浮かぶ。

「誰か女のこに呼び出されたに決まってるよ」そう続けてやると、やっとわかったようで今度は少し顔を赤くして俯いき呟いた。

「そ、そっかゝ。心配することないじゃん」春風は小さな声でつぶやいた。

「優しいね。」僕がそういうと、春風が目丸くする。

「私は、島村君がこんなに話しやすい人なんて思わなかった。うさぎのぬいぐるみもってるしさ」少し照れたように笑う。

「僕は、春風は不思議な人だなんて思うよ。ま、とりあえずマックにいけますか。」返事を聞かずに歩き出す。

「な、待ってよ。」春風が小走りに追いついてくる。

追いついてきたのを確認すると、僕たちは夕日の中を並んで歩き始めた。

第六話

春風が加わったからと言って特に何かが変わったわけではなく、いつも通りに時間をつぶして、いつも通り塾に向かった。そして、いつも通り数学の授業を聞いた後、先生に呼ばれた。内容は簡単。次の模試がんばれよといったものだった。別にみんなの前でいえないのに、わざわざ呼び出していうから気分が悪い。

こういう時、大人は勝手だなと思う。生徒の成績が先生の給料に反映するからかもしれないが、そんなのこっちは一切関係ない。巻き込まないでほしい。そう思いつつも逆らえない僕は、模試があるということを強制的に思い出さされ、憂鬱な気持ちで家に帰る。家以外に帰るところがほかにないから、しょうがない。

重苦しい扉を開けて、ひどく窮屈に感じる家に足を踏み入れた。出来るだけ目立たないように。これは、家でも学校でも変わらない。この世界に自分の居場所なんてないだろうが、生きてるもんは仕方がない。透明人間になるにはなんて、まじめに考えながら音を立てない細心の注意を払ってご飯を食べる。誰もいないときは、ゆつくりご飯を食べられる。そう思いながら冷えたご飯を口に運ぶ。別に味なんかよくわからないけれど、とりあえず胃に流し込んでおく。そうすれば、明日を生きるエネルギーが摂取されるらしいから。もう、寝よう。寝ている間は、何も考えなくていいから。もう何も考えたくない。

どろどろと融け落ちるように眠りにつく。

慎重に慎重に透明人間を続ける毎日は、楽しくはないが辛くはない。だから、平坦な毎日を過ごすふりをした。模試におびえながら。毎日のすべてが、たった数枚の紙切れによって数値化されるその日まで。

僕のこの家での生活は成績にかかっている。

模試の異常な恐怖はここからやってくる。

模試の結果によって生活が良くなることはないが、悪くなることなら多々ある。今日もそうだった。

朝起きると、三人分の朝食の用意がされている。当然僕の席に温かな湯気はたっていない。

僕は台所にいる母親を見なかったことにして、そのまま家を出た。別にどうってことはない。よくあることだ。

成長期の腹の虫がひっきりなしに鳴いている。それをなだめるためにコンビニに入って一番量がありそうで安いパンを1つだけ買う。

まだ学校に向かうには早すぎる時間なので、乗り換え時に駅の外に出た。

まだ朝早いので、どの店もきれいにシャッターが降りていて、あのにぎやかな街がうそのようにしんと静まり返っている。

駅に向かうスーツのサラリーマンの群れを逆走する。

気づいたら、以前不良に絡まれた路地に来ていた。

いないとわかつているのに、ついついあの人を探してしまう。やっぱり、いるわけがなくて少し落胆している自分がいた。気持ちの落ち込みの理由を頭でうまく処理できなくて、整理するために上を見た。

あまりにも真っ青な空が広がっていた。

あまりに雲が一つもなくてなぜか少し落ち込んだ。

ただ、その見上げた先にあの廃墟が見えた。地図をまるで把握していなかった僕はここからこんなに近くにあることに驚いた。時計を見ると、学校が始まるまで時間にはまだ全然余裕がある。

僕の探究心がむくむくとわきあがる。

どうせ、時間ならある。そう思うと、さっき落ち込んだことも忘れて、僕は廃墟に向かってまた逆流を開始した。

第7話

地図は持っていないだったので、ただ廃墟が見える方向にどんどん歩いて行った。

廃墟との距離は思ったよりも近く、ものの10分でついた。新しい発見に、にたつきながら迷わず立ち入り禁止というロープをくぐり、鍵が壊れているドアをあける。

予想通りただがらんとしていた。

予想は当たっていたのになんとなくがっかりする。

一階はところどころに事務机が残っている以外はほとんど何もなかった。

そんなものじゃあきらめられない僕は、小さな期待に胸を膨らませて少しずつ階段を上っていく。

だが、2階にもやっぱり何もなかった。

しばみかけた期待を胸に秘めながらまた階段を上った。

3階は、ごちゃごちゃとしていて、以前使った形跡が残されたままだった。

中にはパソコンも置いてある。もちろん画面はブラウン管だけれど、うれしくなって、3階の探索を開始する。

とりあえずの目標は、パソコンだ。ひっそりとした建物の内を、目標物に向かってすすんだ。

誰もいないのに、というか誰もいないからこそ少しでも音がたとびっくりして、思わず忍び足になっていた。

もちろん電気は通っていないので窓から入ってくる日の光だけが頼りだ。それでも全十分にく、朝の太陽の光で室内は照らされていた。

目標物まで到達した僕は、その性能を確認する。放置されていたパソコンは1999のでかなり古い、がとくに壊れているところは見

当たらない。電源を入れることができないから、動くかどうかが確認できないのが残念だ。

「じゃあ買ってくる。」

僕の背後から突然人の声がした。驚いて振り向くとそこにいたのはあの女^{ひと}だった。

僕が振り向いたのと同時に、その人も僕に気がついた。

そして、普通に近づいてくる。

僕の心臓が速まるのが分かる。一応ここは立ち入り禁止の場所だ。逃げるべきなのかもしれない。が、体が動かない。そして理性と反対の場所で、うれしいと思っている自分がいる。ぼくは、この人にずっと会いたかったのかもしれない。

その人は僕の目の前に来た。

「あれ。ここ、立ち入り禁止のはずなんだけど。」僕の顔を覗き込みながら言う。

「って、あんたどこかで見たことがある気がする。」吸い込まれそうな緑の瞳で僕の顔をじっと見つめる。

「あんた、ユウタだ。不良に絡まれてたやつ。ちがう?」

「はい。あの、あの時はどうもありがとうございました。」僕はこの人が僕の名前を覚えてくれていたことに、何とも言えない不思議な気持ちになった。

「よかった。オレ、人の顔と名前を覚えるのだけは自信があるんだよね。で、こんな朝早くにこんなとこで何してんの?」

僕は何も答えられなかった。何かしてるって言えはしてるけど、危険なんて言うにはおこがましいことはわかっていた。

「まあいいけど。別にオレだって無断に使ってるだけだしさ。ただ、ここはほとんど人がこないから。」

「あの、あなたはここで何をしてるんですか？」僕は思い切つて聞いてみた。

「オレ？別に何もしてないけど。あそこの非常階段で友達とたまつてることが多いかな。」外にある非常階段へと続く扉を指しながら言つた。

「そうなんですか。」

普通にこたえられてしまつて、その後何を言えいいのか分からず僕は、また黙つてしまつた。

「制服を着ているところを見ると、あんたこれから学校なんじゃないの？時間いいの？もうすぐ8時だけど。」

「えー！」時計を見るとあと長い針が頂点に限りなく近くまで登つてゐる。さすがに急がないと遅刻してしまう。

「あ、あのまたここに来てもいいですか？」

「別にここはオレの所有物ではないのでいつでもどうぞ。」

「そうじゃなくて、ええと、またここに来たら会えますか？」後から考えるとよくこんなこといえたなと感心するのだが、その時は一生懸命だつた。

その人は少し驚いた顔をしたが、その後目を細めると僕の頭をくしやつとなで

「夕方なら、だいたい非常階段にいるんじゃないかな。」穏やかにそう答えた。

「あ、ありがとうございます。」というと、ぼくは勢いよく走りだした。走りながら、なんでありがとうございましたなんて言つたんだろうと考えたが、そんなことはどうでもいい。僕は急いでビルを出て、サラリーマンを追い抜かしながら駅へと走つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5480b/>

煙

2012年1月8日20時49分発行